

“The Snows of Kilimanjaro”の世界

西尾 巖

Ernest Hemingway の “The Snows of Kilimanjaro” は、初め雑誌 *Esquire* の1936年8月号に発表され、のちに *The First Forty-Nine Stories* に収録されたものだが、これまでの彼の作風とはやや趣きを異にした興味深い作品である。同じ年の *Cosmopolitan* (9月号) に掲載された “The Short Happy Life of Francis Macomber” には、臆病な人間から勇敢な男へと脱皮する Macomber の姿が行動を通して、巧みに描き分けられているのに反して、この作品は作者自身の分身とも思われる作家 Harry の、死を迎える日の午後から夜半にかけての心理的葛藤を描いた、いわば心理実験小説とでも呼ぶべきものである。1950年に発表された *Across the River and Into the Trees* と同じく、ここには数多くのものが暗示されてはいるものの、明らかな肉体的行動は殆んど含まれていない。死線にさまよう Harry の、過去の生活や現在の心境を、フラッシュバック、モノローグ、会話などの中に織り込み積み重ねて、過去の時間を重層化させ、人生の虚無観を浮きぼりにしている。しかもこれらの実験の成果は、見事なアンサンブルとなって作品に密度を加え、読む者にさまざまな感慨を与えずにはおかないのである。詩的な余韻を響かせる終結部と相俟って、Hemingway のもっとも技巧的な洗練さをみせた作品の一つに数えられるゆえんであろう。

*

アフリカへ狩猟旅行 (safari) にやって来た作家の Harry は、2週間前に作った右膝

の掻き傷がもとで、エソ (gangrene) を起こしてしまった。救援にかけつけるはずの飛行機も車も、どうしたわけか、まだやって来ない。いまはただミモザの木陰で死のベッドに横たわり、あてのない救援の手を待つほかはないのだ。同行した Helen がかいがいしく介抱するものの、Harry の心を動かすことはできない。物語はまず愛情に生きる Helen の世界と、死を前にして苛立ちにも似た Harry のそれとのはげしい対比で始まる。

‘Please tell me what I can do.
There must be something I can do.’

‘You can take the leg off and that might stop it, though I doubt it. Or you can shoot me. You’re a good shot now. I taught you to shoot, didn’t I?’

‘Please don’t talk that way. Couldn’t I read to you?’

‘Read what?’

‘Anything in the book bag that we haven’t read.’

‘I can’t listen to it,’ he said. ‘Talking is the easiest. We quarrel and that makes the time pass.’

‘I don’t quarrel. I never want to quarrel. Let’s not quarrel any more. No matter how nervous we get. Maybe they will be back with another truck to-day. Maybe the plane will come.’

‘I don’t want to move,’ the man said. ‘There is no sense in moving now except to make it easier for you.’

‘That’s cowardly.’

‘Can’t you let a man die as comfortably as he can without calling him names? What’s the use of slanging me?’

‘You’re not going to die.’

‘Don’t be silly. I’m dying now. Ask those bastards.’ He looked over to where the huge, filthy birds sat, their naked heads sunk in the hunched feathers. A fourth planed down to run quick-legged and then waddle slowly toward the others.

‘They are around every camp. You never notice them. You can’t die if you don’t give up.’

‘Where did you read that? You’re such a bloody fool.’

—‘The Snows of Kilimanjaro’, pp. 58-59.¹⁾

Helen は絶望的な試練をいくたびか経てきた女性であった。美人というほどではないが、好ましい顔立ちと気持のいい肉体の持主である。若くして夫と死別し、暫らくは生れたばかりの2人の子供に身を打込んでいたが、やがて子供たちは彼女を必要とせず、いっしょにいるのを迷惑がるようになった。そこでまた既の世話や本や酒に没頭する生活を続けるうち、恋人も何人が現われたが、亡夫に比べたらだれもすぐ退屈を覚えてしまうような男ばかりであった。子供のひとりが飛行機の墜落事故で死ぬと、それからというもの恋人を欲しがらず、酒もうさをはらす麻醉剤にならなかった。ふいに孤独感にひどくおびえるようなこともあって、自分が尊敬できるような男を求めた。それが Harry だったの

だ。²⁾ 従って彼女には Harry に賭ける「新生の願いと希望」があった。いま又もや襲いかかる人生の危機にのぞんで、彼女はトラックが来ることを、飛行機が救援にかけつけてくることを確信せずにはいられないのである。「あなたは死にはしない」「諦めたりしなければ死んだりにはしない」という彼女の言葉には、そんな執念にも似た願いがこめられている。そうした彼女から見た場合に「おれは動きたくないんだ」とか「おれはいま死にかかっているんだ」と肉体の抵抗を諦めてしまっているかに見える Harry の態度は、それこそ「卑怯というもの」なのである。しかし死というものをはや免れがたい厳粛な事実として受けとめている Harry にとって、Helen のそれは、すでに空しい努力としてしか映らない。「きみの気持を楽にするためでなければ、いま動くなんて意味がない」し、「できるだけ安楽に男を死なせてやれないのかい、悪口など言わずに」という言葉には、人生につまづき、死との対決に疲れてしまった男の諦観がうかがえる。

このようにして男女2人の世界の断絶は、Harry の死を前にして、いっそう烈しい対比となって描き出されてゆくが、それは舞台となっているアフリカそのものに対する2人の考え方からして、根本的に異なっていることが伏線になっている。すなわち、Helen にとって、「ここに来なければ、パリにいたら、こんな目には会わなかっただろうし、もし狩猟がしたいのならハンガリーに行って愉快地に狩ができた」はずで、アフリカは何よりも呪わしい土地でしかないのだ。³⁾ しかし Harry にしてみれば「作家としての才能を知覚の尖端を鈍らせるほどに大酒を飲み、怠惰や、無精や、俗物根性や、高慢や、偏見やその他あらゆることのために自ら破壊してきたすべての社会と断切って」再出発しようという固い決意を抱いてアフリカへやって来たのだ。従ってこの旅行に贅沢はなくても辛くはなかった。「ちょうど拳闘家が山にこもって労働したり、トレーニングしたりして肉体から脂肪

を消耗させるように、こんなことをして修業の道にもどっていけるものと考えていた」のだった。アフリカを選んだのは「人生の盛りするとき、もっとも愉しかった思い出がある」ところだったからにほかならない。⁴⁾

しかし、アフリカに立ち戻って再出発しようとした Harry の計画は、不注意がもとでエソを起こしてしまったため、もろくも崩れ去ってしまった。救援の手だても皆目見当がつかぬいまとなるとは、除々に迫り来る死の影との対決に全精力を注がざるを得ない破目になってしまったのだ。炎熱の平原を臨むミモザの木陰でこの2週間を過ぎて来たが、今日は不思議と苦痛がなくなり、それと共に死への恐怖感が消えてきた。いまあるのは「ただ猛烈な疲労感と、これでおしまいになるのだという憤りだけだった。何年もの間、彼の心につきまとして来た死というものに、殆んど好奇心もわかかなかった。いまとなるとはそれ自体何の意味もなく、すっかり疲れ切ってしまうと、それもどんなに安楽になるか、不思議なくらいだった」し、また「充分にわかってよく書けるようになるまではと書かずにとっておいたことも、もう書くこともないだろうし、書こうと試みて失敗しなければならぬことも、もうないだろう」という諦めの気持へと落ちこんでゆくばかりだった。しかしその反面、残り火のパッと燃え上がるように、「おれは何も残してゆきたくないんだ」「おれは書きたい」「口述筆記はできないだろうね」と胸中にうづまく作家としての本能が頭をもちあげるのだった。

There wasn't time, of course, although it seemed as though it telescoped so that you might put it all into one paragraph if you could get it right. — *ibid.*, p. 74.

Hemingway は *The Green Hills of Africa* の中で、「作家にとってもっとも困難なことは、時間がいかにも短いので、かれが生きぬいて仕事を完成することだ」(The

hardest thing, because time is so short, is for him to survive and get his work done.) と書いたが、'Kilimanjaro'のこの場合にも、それを裏書きするかのように、迫り来る冷酷な死の影と1刻を争う作家神精の発露がうかがわれるように思われる。書き得ぬ時間の切迫は、次々に展開する回想にも現われ、5節に分れた回想は断片的で起伏が大きく、熱病的にかけめぐめるかのようなのである。しかも死の匂いと影は、回想の間にも着実に Harry の身边に迫ってくるのだ。「おれは疲れた」という Harry のことばの裏には、フラッシュバックによって展開される、彼の過去や思想のもつ時間の重みを感じずにはいられない。

第1の回想は Karagatch の停車場から始めて、ブルガリアとオーストリアの冬が描かれる。戦争があって住民の入れ換えをやった折には、住民は死ぬまでブルガリアの山地の雪を踏みつづけ、脱走兵は雪の中を憲兵に追われて血だらけの足でやってきた。Madlener の小屋で1週間吹雪に閉じこめられて、賭けごとに明けくれた日々。Johnson がクリスマスの休暇で帰るオーストリアの将校たちの列車を爆撃し、ちりぢりになって逃げるところを機銃掃射したことなど、場景は冬と戦争と死が支配的である。しかし一方では清冽な雪はスキーをした Voralberg と Arlberg の詩情豊かな思い出につながって行って、まだここでは Harry の気持にゆとりが感じられる。第2の回想は Constantinople, Anatolia, Paris へと飛ぶ。失った女への慕情、イギリスの下士官と商売女をめぐる立ちまわり、ギリシア・トルコ戦争でみた白いバレーのスカートにリボンつきのそり返った靴をはいた死人、逃げだす兵隊にピストルを向ける将校など、口に1セント銅貨のような味を覚えた戦争の惨劇の世界が展開する。その反面パリの喫茶店で間抜けな表情を浮かべながらダダイズムの話をしているアメリカ詩人、仲なおりした妻のアパートへ戻ったのもつかの間、1通の手紙がもとでもとのもくあみにな

ってしまったことなども思い出されてくる。しかし結局「書くことはたくさんある」が「もう書くこともないだろう」と自分の命の終りにあることを悟るようになる。第3番目には丸太小屋の焼跡にころがるおじいさんの銃のこと、戦後のインフレで Triberg のホテルの経営者が縊死したことなどが、断片的に脳裡をよぎった。パリコミューン自治政治下の町にいた党员はヴェルサイユの軍隊に捕えられ、だれかれの区別なく処刑されてしまった。混乱したパリでの民衆の生活や文学修業のことなど、主として戦後の世相がとらえられているが、ここにも死の匂いは絶えない。第4は牧場の思い出にまつわる悲劇だ。頭の足りない少年は、制止も聞かずに納屋に盗み入ろうとした老人を、ライフルで射殺してしまった。発見されたとき、老人の死体は家畜の檻の中で凍りつき、犬に喰いちぎられていた。しかし少年にはシェリフに手錠をかけられるまで、罪の意識はまったくなかった。無知ゆえの惨劇である。第5は擲弾兵将校の Williamson がドイツの巡邏隊の手榴弾にやられたときのことだ。臓腑が飛び出し、鉄条網にひっかかったので、みんなは彼の臓腑を切りとらねばならなかった。「ごしょうだから、おれを射ち殺してくれ」と彼は Harry に向かって叫んだ。短い挿話ながら読む者に思わず寒気を感じしめるような迫真の文章である。

このように彼の過去は回想を通して断片的にわれわれの脳裡に刻みこまれてゆく。そればかりでなく、回想の間にはさまる会話やモノログがさらに時間の重層化に拍車をかけてゆくのである。しかもその時間的構成は前後の脈絡を失って、バラバラに配置されているのだが、同時にこれは Harry をとりまく世界の、立体的多角的展望を読者に与える役割りを果たすことにもなっている。そしてこれらの回想はすべて行動だけが描かれていて、その時点での Harry のコメントは何一つとして語られていない。これは、現在の Harry

が身動きもままならぬ状態にあるのと絶妙なコントラストをなしているのである。また回想の種類や量も第1から第3のものまでは62行、74行、97行と漸増しながら第4、第5は31行、14行と急激に先ずぼりに短くなっている。⁵⁾これは死が Harry にますます近づいてきて、切迫してきたことを示す伏線と言えるであろう。とにかくこの回想のスケッチは、Harry の過去の生活や思想を重層化してパースペクティブな視点を読者に与えようとする作者の意図がはっきりとうかがえるところで、Hemingway の技法が緻密な計算の上になりたっていることを示すものである。

*

Hemingway は純粹に虚構の世界を組み立てていった作家ではなく、自己の生活や経験を色濃く作品中に反映していった作家であった。19歳の夏にイタリア戦線で受けた瀕死の重傷からはじまって、パリでの文学修業時代、闘牛、魚釣り、アフリカでの狩猟、スペイン内乱での見聞など、殆んど小説の中に取りこまれていることをみれば、それは明らかである。Hemingway における生活と作品との照応は、ほぼ明白だといっても過言ではないくらいだが、これは彼が作品の中で、次のように言っていることばに集約されているといつてよいであろう。

Now, knowing how it had all been, even remembering the earliest times before things had gone badly was not good remembering. If he wrote it he could get rid of it. He had gotten rid of many things by writing them. — 'Fathers and Sons,' *The First 49 Stories*, p. 463.

When writing a novel a writer should create living people; people not characters. A character is a caricature... People in a novel, not skilfully contracted characters, must be projected from the writer's assimilated experience, from his

knowledge, from his head, from his heart and from all there is of him.

—*Death in the Afternoon*,
pp. 182-183.

つまり Hemingway は純粋な芸術的衝動に駆られて文学作品を生み出していったのではなく、自己の内にあるもの——不安とか恐怖、快・不快の原因といったようなもの——を作品中に吐き出すことによって自己を救済していったのだと思われる点が、ここに端的に表現されている。このような点に彼の文学が、ともすると、西欧近代小説の枠をはみ出して、わが国の私小説の領域に近い存在にあると思われるのであるが、この特性は‘Kilimanjaro’も例外ではないようで、Hemingway 自身の個人的な記憶がかなり色濃く投影されているとみなければならぬ。とりわけこの回想のシーンに、数多くの体験が盛り込まれていることを指摘する批評家は少なくない。Carlos Baker によれば、Hemingway は後になって、この作品の中に4つの小説をまかなうに足る材料を使用したと述べるとともに、“I put all the true stuff in, and with all the load, the most load any short story ever carried.”とも語ったということである。⁶⁾ ここでいう“true stuff”の多くは、Hemingway 自身が過去に体験したことの圧縮された姿をさすにはかならない。Walloon 湖畔にあった Grandpa Bacon の丸太小屋、彼が第1の妻 Hadley と1922年から23年にかけて住んだパリの丘の上での生活、1922年の夏に Black Forest へ釣旅行に出かけたときの思い出、あるいはまた Constantinople への旅をロマンチックに虚構化したりしている。それに彼には Schruns やスキー教師 Walther Lent や Madlener の小屋でやったポーカーの記憶があったし、川の対岸の山の ‘silvered gray of the sage-bush’⁷⁾ とともにワイオミングの Nordquist 牧場のことを思い出して書いている、と Baker はいうのである。

しかし何といてもこれら回想の主体は

Hemingway 自身の戦争体験に裏打ちされた冬(雪)—戦争(革命)—死につながる厳しい一線にあり、ときに詩情をたたえた美しい思い出に走っても、それは時間の重みを加える補助的な点景でしかない。そして過去の死に結びつく思い出は、死の匂と影への濃度となって Harry の周辺にしのみより、抜きさしならぬ絶対的な境地へと追いこんでゆくのである。回想では第3者の死であったものが自身の現実の問題となって直面せざるを得なくなったいまも、あれほど意識されていた死が Harry にはなぜか興味をまったく持たなくなり、いまはただ「ひどい疲労感と怒り」(a great tiredness and anger) を覚えるだけになっている。⁸⁾ 従来の Hemingway 文学と異なる一端をここにもうかがうことができようが、これには作者 Hemingway の気力のゆらめきが作品に反映して easy な諦観へと走らせているのだとも考えられる。しかしそれにはもう少し諸種の要因を考察する必要があるだろう。

*

Harry が回想から現実にはひきもどされて、自分の実在を確認する段階にいたるたびごとに、死のシンボルが彼の過去のことへの冷笑、あるいは死がさらに一步近づいたことを示す強調の象徴として、シーンに登場してくることに注目したい。死のイメージは前述の回想を結ぶ風景に出没する動物、すなわち Helen に射止められる牡羊 (tommies)、ハゲタカ (vultures)、ハイエナ (hyenas) によって運ばれてくる。Harry の肉体がエソのために腐り不快な匂いを発しているのは、死という理念でこれらの動物と関連するのは言うまでもない(さらにエソ (gangrene) のもつ道徳的腐敗や墮落という意味を併せ考えれば、Harry の病根と彼の過去とが皮肉な関係におかれていることを見出しうるであろう)。この物語の冒頭で、彼がミモザの木陰で死のベッドに横になっているとき、炎熱の平原にハゲタカがみにくい恰好でうずくまっているのを凝視するところがある。日が暮れると、

ハゲタカはみな1本の木にむらがって重そうにとまる。ハイエナの声が平原に響くとき、死のイメージはハゲタカからこの死の貧欲漢へと移行するのだ。そしてHarryが死の最初の強い予感を感じたときには、死は‘a sudden, evil-smelling emptiness’のかたちでしか捉えられていないが、Harryには「奇妙なことに、あのハイエナがその空虚の端をすするとすり抜けて行くように思われた」(the odd thing was that the hyena slipped along the edge of it [emptiness]⁹⁾)のである。

かくして死はついにHarryが予期しない方法でやってくる。終始彼はハゲタカやハイエナを死の先ぶれとして凝視しているが、時時彼は死のいろいろな姿や死がついにやってくるであろう方法をすら回想して、次のように述べている。

He lay still and death was not there. It must have gone around another street. It went in pairs, on bicycles, and moved absolutely silently on the pavements.

—‘The Snows of Kilimanjaro’. p. 77.

‘Never believe any of that about a scythe and a skull,’ he told her. ‘It can be two bicycle policemen as easily or be a bird. Or it can have a wide snout like a hyena.’

—*ibid.*, p. 88.

彼の心はその昔過したパリ時代のことに飛んでいたのだが、次の瞬間にはアフリカの現実を引き戻されて、死の姿を自転車にのった巡査から鳥やハイエナに見出している。これはまた死が遠いものから、より近い存在に、すなわち死が寝台の脚もとにまで迫ってきたことを示すのだが、やがて死はなおも彼に近づいて、もはや形をなさぬ、ただ空間を占める絶体的な大きさとなって彼の胸の上に重たくのしかかり、口をきくことはもとより、息もできなくしてしまう。そしてHelenの指図

でHarryのベッドがテントの中へ運ばれるとき、ふいに何もかもよくなり、重みが彼の胸からとれるのである。

He could not speak to tell her to make it go away and it crouched now, heavier so he could not breathe. And then, while they lifted the cot, suddenly it was all right and the weight went from his chest.

—*ibid.*, p. 80.

彼が死というものに対して、これまで恐れていたのは苦痛だけであった。そして苦痛が今にも彼を破壊しそうだと思われたときに止んでいたことは、最後の回想のシーンの前で述べられている。¹⁰⁾ その後は意職の混濁が認められるにしても現実の世界へともどり、「おれは書いていたんだ(I’ve been writing)」¹¹⁾と作家の本能にも似た義務感と死との相克が展開される。しかし‘The weight went from his chest.’以後には死の影はなく、救いへの道をまっしぐらに直行しているかのようである。このことは、これまで何かにつけて意識されていた死という観念が、ここで束縛をはなれた、つまり「永遠の眠り」への旅立ちをしたことを意味するのではあるまいか。なぜならば、HarryがComptonの飛行機に乗せられてキリマンジャロの頂きに向い、「自分が行こうとしているところなのだと知った」とき、地上ではハイエナが奇妙な声をたてるとともに、Harryの死が現実なものとして認識されているからである。

救援の小型機がNairobiへ向う途中で、滝の中を飛ぶような嵐をぬけると、「前方、視野一杯に、全世界のように幅広く、大きく、高く、陽をうけて信じられないくらいに白く、キリマンジャロの四角い頂きが現われた。」

Then they began to climb and they were going to the East it seemed, and then it darkened and they were in a storm, the rain so thick it seemed like

flying through a waterfall, and then they were out and Compie turned his head and grinned and pointed and there, ahead, all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. And then he knew that there was where he was going. —*ibid.*, p. 82.

物語はここに至って最高潮に達する。Harryがアフリカへ来たのは前にも述べたように再出発のため、拳闘家が山にこもってトレーニングを積み肉体から脂肪を消耗させるように、自分の魂から脂肪を拭いとることができると考えたからだった。それがここでついに純粋な自分を発見し、行くべきところを悟ることができたのだった。この部分は詩的な情緒がもっとも味わい深く発揚される箇所であるが、仔細に読めば、これは冒頭におかれてこの作品の主題を暗示するやや長いエピグラフと相関関係にあることを認めざるを得ない。そこには次のような謎めいたことばが述べられているのである。

Kilimanjaro is a snow covered mountain 19,710 feet high, and is said to be the highest mountain in Africa. Its western summit is called the Masai 'Ngàje Ngài,' the House of God. Close to the western summit there is the dried and frozen carcass of a leopard. No one has explained what the leopard was seeking at that altitude.

Hemingwayはアフリカに滞在中、キリマンジャロの西峰がマサイ語で'Ngàje Ngài', すなわち'House of God'といわれていることを知った。山嶽と家との連想は彼の心の中に古くからある観念で、すでにこれを *The Sun Also Rises* や *A Farewell to Arms* で使っていると Bakerは述べている。¹²⁾また

豹のひからびて氷った死骸のことは Philip Percival から聞いて知っていたとのことで、彼自身ものちにこれを 'part of the metaphysics,'として用いたことを認めている。このようなことから考えると、Hemingwayはこのエピグラフの部分を作品のテーマを暗示する非常に大事な要素として考えていたことは明白である。豹が19,710フィートもあるキリマンジャロの頂きで求めたもの、すなわち「神の館」= (精神の不滅) を説明するのは Hemingway 自身でしかあり得ないかもしれないが、これは Harry が苦闘した末に結局自分の魂を救おうとして果さずに死んだ姿とパラレルな関係にあるのであろう。豹の冒険と行動こそは Hemingwayの歩んできた道にほかならない。Baker はかつて山や雪は、Hemingway 文学では、理想とか幸福の象徴であり、雨は不幸のシンボルであると分析してみせた。この解釈に従えば、Harry がキリマンジャロの頂を「自分の行こうとしているところ」だと知ったということは、不幸を乗り越えて理想とか幸福の目的に向っているのだということとも言えよう。そして死につながる絶望と「陽を受けて信じられないくらいに白い」理想に満ちたキリマンジャロの頂きをここで鋭いコントラストを以て描いているのである。そうだとすれば、ここにも Hemingway の死を描いて生をのぞむ文学的特質をみることができると言えるようである。

それはさておき、この作品で扱った死に対する Hemingway の態度には、他の作品にはみられない特異な点が際立っていることを指摘しておかなくてはならない。いうまでもなく彼は、これまでも死を扱う作品を数多く発表してきた。第1次大戦で経験した心身の痛手は、消えることなく作品の底流をなし、死が Nick Adams もの以来最大の関心事であったことは周知のことである。しかしこれら一連の作品で死を描写する彼の態度といえ、いわゆる 'hard-boiled materialist' そのもので、無表情な姿勢をくずしたことはなかったといえよう。たとえば 'A

Natural History of the Dead' で描いた戦場の死体は、"I don't know, but most men die like animals, not men."¹³⁾であったし、*A Farewell to Arms* のクライマックスで Catherine が病院で死んだときの姿は、Frederick にとって彫像のようにしか見えない (It was like saying goodbye to statue.),¹⁴⁾ そしてまた Francis Macomber の場合には死んだ瞬間の描写はあっても、それ以後の世界を追跡して描くことはしていない ("... he felt a sudden white-hot, blinding flash explode inside his head and that was all he ever felt."¹⁵⁾)。これが従来の Hemingway の文学であった。しかし 'Kilimanjaro' で Harry と Compton がキリマンジャロの頂きに向って飛行する場面には、これまでの彼の作品には見られない新しい試みがあるように思われる。すなわち、ここには Harry の死後の世界をほのめかしているばかりでなく、キリスト教の昇天思想につながるものをかなり色濃く採り入れているかのように思われるからである¹⁶⁾。Hemingway の2番目の夫人 Pauline が熱心なカトリック教徒であったため、彼は彼女と結婚した1927年にカトリックに改宗している。しかしその後の彼の生活態度を考えれば、彼がどこまで熱心なカトリック教徒であったかは疑わしい。少なくとも、死とともに霊魂は天上に昇り、肉体は地上に残って、腐り、土と化すという信仰を、一時的にもせよ彼が持つようになった機縁が、その当時の彼にあった様子はないようである。そのようなことでなく、このキリマンジャロへの飛翔の一節は、Baker が指摘するように、この作品を書いた2年前の1934年にアフリカ狩猟中彼がアミーバ赤痢にかかり、小型機でキリマンジャロを越えて Nairobi に運ばれたときの体験を再現したもの、というのが真相であるかもしれない。¹⁷⁾ しかし、それにしても、彼がキリマンジャロの西峰を Ngàje Ngài と信じるマサイ族の信仰に共感して、中腹にミイラのようにひからびて凍りついた豹の死骸に

「永生の希望」を託し、キリマンジャロの四角い頂きを Harry の霊魂の休息所とみたらしいことは、神の存在を無視し、死を即物的にしか解釈しなかった Hemingway のこれまでの創作態度からみて、何か異質なものを感じずにはいられない。全篇をしめくくる感動的で詩情あふれる場面であるだけに、よけい目立つのであるが、このようなところにも彼の精神的なゆらめきを汲みとることができるように思えて仕方がないのである。

われわれは彼の作風や喧伝されているいかにも男性的な生涯に眩惑されて、これまで彼に対してある種の固定観念を持ちすぎてきたきらいがなかったであろうか。このような疑問を抱くというのも、彼の本当の姿には細心で精神的にも傷つきやすいもろさがあるように思えてならないからである。彼が high school 時代に家出を1度ならずしていることや晩年の自殺にそんな因子が端的に認められるように思えるし、作品にも時に宗教的な描写が顔を出すことがあるのを思い起こさずにはいられないのである。しかもそのような作品はきまって彼も精神的に不安定な時期に生まれているのだ。これは、表面的な豪放さにも拘らず、結局は精神の安らぎを求めて宗教に帰ってゆく彼の人間的なもろさが、心のどこか奥底にひそんでいることを証明することにはならないだろうか。

Hemingway のこの時期における精神的な不安定さを裏づける要因は、いろいろあつづけることができるようである。Baker は Hemingway が Fitzgerald にも、また多くの友人にもかくしていたことに、当時の彼が定期的に誇大妄想狂から憂鬱症にかけて精神的に大いに揺れ動く欠陥があり、友人の Ivan Kashkeen は彼のこの苦悩を 'mens morbidus in corpore sano.' (健全な身体に不健全な精神) とみていた、とその辺の事情を明かにしている。¹⁸⁾ さらに彼の著作年表を調べてみれば判然とするように、*A Farewell to Arms* (1929) を世に問うてから 'Kilimanjaro' まで、7年の歳月が流れているに

も拘らず、彼は目星しい作品を何一つ発表していないのだ。これは前作をしのぐほどの作品は書けないのではないかという自信のなさからくるスランプを意味するものとも受けとれよう。金はあったが、Pauline との結婚生活はうまくいってなかったことも大きな要因であっかもしれない。さらに、1930年代の政治的社会的関心が彼に激しい動揺を与えていたところへ、これまでこれらの問題に背を向けて人間の否定面だけを描いてきた彼の作家態度に、このころようやく非難が集まりつつあったことも見逃してはならないことだろう。世評に敏感だった Hemingway にとって Wyndham Lewis の「ヘミングウェイほど政治に対して完全に心を閉ざしている作家は想像することができない」¹⁹⁾ ということばほど辛く響いたものはなかったのではないだろうか。‘Kilimanjaro’ がこのような四囲の状況下で執筆されたことは十分考慮に入れてよいことである。

この作品を生むにあたって、彼が1933年から34年にかけてアフリカへ狩猟旅行に出かけたときの経験が大いに役立ったことは言うまでもない。しかし後になって彼が説明したところによると、この作品のテーマを得るに至った直接のきっかけは、1934年の4月にニューヨークでさる金持の婦人から、費用をもつからもう一度狩猟旅行に出かけてみないかともちかけられたことにあるという。その年の夏に Key West に帰った彼は、彼女の申し出を受けて金持連中と無目的な人生を送ったら自分はどうなったであろうかと、自分の来し方と併せて行く末をいろいろ夢想して書きあげたのがこの作品であったというのである。そしてそれまで Henry Walden としていた主人公の名を、最終草案ができていたころに会ったワシントン大学の英語教授 Harry Burns の名を借りて変更し、同時に題名も ‘A Budding Friendship’ から ‘The Snows of Kilimanjaro’ に改めたということである。²⁰⁾ この作品が世評をふまえた内省から生れた Hemingway の真情の吐露であ

ったことは作品の随処に見られる断想から十分にうなずけるものがある。‘Kilimanjaro’ が生と死の問題をテーマとした作品であることには異論はないであろうが、Harry の凋落した姿に Hemingway 自身の作家的危機を見出したり、金のために半生を浪費した自嘲にことよせて、微弱ながらも社会的関心に反応してみせているところなどに、1930年代の彼が自分の作家的立場に対していかに不安を抱いていたかを、はからずもここに表明しているといつてよいであろう。そしてその表現手段として Philip Young が指摘する Bierce の ‘An Occurrence at Owl Creek Bridge’ (1891) の形式を、たとえ借りたとしても、完全に Hemingway のものになっているのであれば、許るされてもよいのではないだろうか。²¹⁾

ただし技巧的な面から考えると、この作品に試みられた意識の流れの方法的適用に、何かもう一つ統一された結晶がみられないのは残念なことである。ぎりぎりと絞った弓から発する矢が、時に詩的な感情の世界へと、また Fitzgerald を揶揄した自己顕示の文章へとそれてゆくのだ。これもエソからくる熱病のしからしむるところと言えば面白いだろうが、戦争や死において人生否定を、スキーや商売女などとの回想で人生肯定をという2面的態度は、作品の効果を分裂させ、一方が夾雑物的な感じを与えずにはおかないのである。もともと Hemingway は説明や意味づけをできるだけ排除し、行動やジェスチャーやそれらと無生物ないし自然との組合せによって、説明と意味とを暗示する方法を得意とする作家である。従ってその特質からいって、素材や舞台がある程度限定されもしてくるし、あまり複雑であったり、余計なものは排除されなければならない。可能な限り簡略化されて、説明や意味づけを暗示する程度のものにしておくべきなのだ。死に臨んで駆けめぐる想念を伝える手法にも、度がすぎれば、かえってわずらわしさが目立つことになるのである。Alfred Kazin はこの作品のクライ

マックスにただよう詩情にひかれてか ‘the extraordinarily brilliant story of this late period’ と激賞しているが、Philip Young は ‘technically Hemingway’s most accomplished piece’ と認めつつも、‘less tight and dramatic than the Macomber one’ といっている。Young はこの作品のもつ ‘pointless’ な面への不満を述べたものであろう。この作品の基本的な仕組みは、Harry が作品中でしばしばいっているように、また Hemingway 自身も回想しているように、書きとめておきたい幾つかの短篇をモノローグや会話で結び合わせた、いわばオムニバスの形式でなりたっている。しかもその短篇はさらに幾つかの場面に核分裂していっているのである。その原型を初期の *In Our Time* と同質のものに求めることもできようが、回想が大きなウェイトをもつこの作品には、ここで選ばれた方法がもっとも適切な手法だったとも言えるかもしれない。このようなところにも、この時期の Hemingway が精神的な不安を乗り越えて、何とかして作品に緊迫感を与えようと苦心していたあとがうかがえるようである。技法、内容からいくつかの問題点をひろえるにしても、Hemingway の虚無的な人生観を集約的にまとめあげた技量はさすがで、数ある彼の短篇の中でも ‘Kilimanjaro’ の持つ価値は、末永く失われることはないであろう。

—NOTES—

- 1) Ernest Hemingway : *The First Forty-Nine Stories*, Jonathan Cape, London, 1955.
以下 ‘The Snows of Kilimanjaro’ からの引用はこの版による。
- 2) *ibid.*, p. 69 ff.
- 3) *ibid.*, p. 61.
- 4) *ibid.*, p. 66.
- 5) EH : *F 49 S.*, Jonathan Cape, 1955. 版による。
- 6) Carlos Baker : *Ernest Hemingway, A Life Story*, 1968, p. 289.
- 7) EH : *F 49 S.*, p. 77.
- 8) *ibid.*, p. 60.
- 9) *ibid.*, p. 70.
- 10) *ibid.*, p. 78.
- 11) *ibid.*, p. 79.
- 12) CB : *EH—A Life Story*, p. 195.
- 13) EH : *F 49 S.*, p. 416.
- 14) EH : *A Farewell to Arms*, Penguin Book, p. 256.
- 15) EH : *F 49 S.*, p. 42.
- 16) 浜田政二郎 : 「‘Kilimanjaro’ への飛翔」、『英語青年』Vol. CXV, No. 11, p. 699.
- 17) CB : *EH—A Life Story*, p. 289.
- 18) *ibid.*, p. 291.
- 19) Wyndham Lewis : *Men Without Art*, 1934, p. 17.
- 20) CB : *EH—A Life Story*, p. 289.
- 21) Philip Young : *Ernest Hemingway, A Reconsideration*, 1966, p. 197.